

### 第3 問題作成部会の見解

## 世界史 A

### 1 問題作成の方針

平成 21 年度の「世界史 A」の問題作成に当たり、問題作成部会は昨年度の二つの基本方針を以下のように踏襲した。

(1) 高等学校学習指導要領への対応

諸地域の形成と地域間の交流を主題に据えるように意識し、近現代における政治・経済・文化のグローバルな結び付きに留意して作題した。

(2) 新教育課程教科書の特色を踏まえた出題

「世界史 A」の各教科書は、共通したコンセプトに従いつつも、取り上げる主題や内容に独自色を濃くし、それぞれの個性を強めている。こうした教科書の多様性を考慮しつつ、いずれの教科書で学んだ受験者にも理解し得るリード文と設問を心掛けた。

出題範囲と形式については、一昨年度からの方針として、「世界史 B」との共通問題を廃止し、「世界史 A」固有の問題を作成した。問題数についても大問を 3 問、小問を 33 問とし、受験者の負担を軽減するように配慮した。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

#### 第 1 問について

本題では、モニュメントと歴史的建造物という文化財を題材とした。イギリス、ドイツ、タイの具体例から、それぞれの国でモニュメントが表現している過去の理解や、歴史的建造物の歴史的背景とそこからうかがえる国際関係や政治の歴史について問うことで、文化と政治の相互関係への理解を深めることを目的として作問した。

Aでは、現在大英博物館に展示されている「エルギン・マーブルズ」の由来を取り上げることによって、文化財の本来の展示のあり方を考えさせることを目的とし、高等学校学習指導要領「世界史 A」「(1)諸地域世界と交流圏」をテーマとして作問した。問 1 の正答率が高く、問 4 の正答率がやや低かったが、中間全体としてはほぼ標準的な水準であった。

Bは、モニュメントとしてドイツ国会議事堂を取り上げ、統一と分断というドイツの近現代史を貫く基本的性格を具体的に理解させることを目的とした。高等学校学習指導要領では、「世界史 A」「(4)現代世界と日本」をテーマとして作問した。正答率は、問 7 が 7 割台後半と高かった以外は、どれも 3～4 割と低調であった。ナチスに関してはある程度知っていても、それ以外のドイツ現代史の史実に関しては理解が低いということであると思われる。

Cでは、タイにおけるモニュメントの建造を通して、20 世紀における西欧列強の動きにほんろうされたアジア・アフリカ地域の状況について理解させることを目的とし、高等学校学習指導要領「世界史 A」「(4)現代世界と日本」をテーマに作問した。問 10 の正答率が若干低めであったほかは平均的な正答率であった。

## 第2問について

本題では、「歴史における人々の移動や離散」に関する出題であった。「離散」はユダヤ人のディアスポラを中心に語られることが多い。しかし、世界史における「離散」には、様々な形態があり、離散の原因も多様である。離散という観点から世界史を見ることにより、人々が歴史の中でどのように生きてきたかを動的なイメージで理解させるという意図で出題した。高等学校学習指導要領「世界史A」の2「(2)一体化する世界」をアメリカ大陸、ロシア、東アジア世界に適用している。全体としての得点率は4割弱であった。

Aでは、「離散」の代表的な歴史的事例であるアフリカ系奴隷を題材として取り上げ、その歴史的背景としての近世ヨーロッパ世界の対外進出とその現代史における意義を理解させることを目的として植民地化の時代背景や、太平洋貿易の拡大、差別や人権について基礎知識を問うた。問1、問4は若干正答率が低かったが、問2、問3は普通であった。

Bでは、中国からの東南アジア地域への移住者の増加と、近代中国の社会変動の関連、更には移住者たちの第二次世界大戦後の置かれた状況を理解させることを目的とし、高等学校学習指導要領「世界史A」「(2)一体化する世界」を、東アジア地域を中心に作問した。中国と東南アジアの近現代史の基本事項を問うもので、正答率も全体の中ではほぼ平均的であった。

Cでは、戦争や革命を契機とした「離散」について触れ、離散の歴史の悲劇的な側面に注目して作問した。ユダヤ人のシオニズム運動を問う問9、ロシア2月革命後の政権を問う問10は、受験者にとってなじみの薄い分野であるからか正答率はやや低かった。ソヴィエト崩壊後のロシア大統領を問う問11は、ごく最近の出来事であるからか約6割とまずまずの正答率だった。

## 第3問について

本題では、世界史、主にイスラーム世界、インド、ヨーロッパにおける政治・宗教・社会の伝統とその変革について題材としながら、世界史における伝統とその変革を理解させる意図で作問した。全体としての得点率は、ほぼ平均的であった。

Aでは、ムスリム社会においてイスラーム法に基づく伝統の成立と、それを変革する改革運動や政治運動について理解させることを目的とし、高等学校学習指導要領「世界史A」「(1)諸地域世界と交流圏」のウ「イスラーム世界」にそって、イスラーム世界をテーマに作問した。正答率は、問1、問2でやや高く、問3、問4でやや低かった。

Bでは、インド固有の伝統や変革といった問題が、西欧との出会いによって起こった歴史的には新しい問題であること、またそれが今日の国民国家の存立基盤にあることを理解させる意図で作問した。すべての設問で正答率が非常に高く、南アジア史をきちんと学習した受験者には勉強のかいのある問題であったと思われる。

Cでは、ヨーロッパの伝統的主権国家体制の成立と、その変革をもたらすことになるヨーロッパ統合への歩みを理解させることを目的とし、高等学校学習指導要領「世界史A」の「(2)一体化する世界」に関して、基本的事項を問うた。正答率は問9でかなり低く、問10、問11でやや高かった。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

#### 第1問について

本題全体については、「モニュメントや歴史的建造物」という視覚的対象を題材に、受験者の「興味・関心」を「歴史的考察力」に発展したことを意図したものとして、テーマ設定について肯定的評価を受けた。特にA、Bではその出題の観点が明確であると評価されており、全体として「世界史A」にふさわしい設問であったと考える。

Aでは、パルテノン神殿を題材にしてギリシアについての基本的な知識を問うものであったが、全体としての難易度のバランスは悪くなかったと考える。問2は、基本的事項を取り扱うとともに、「ギリシア・ローマ文明の伝統」という観点を含む良問であるとの高い評価を受けた。今後の問題作成の肯定的な材料としたい。

Bでは、問6が「近現代史を重視するという『世界史A』の趣旨にそう良問であった」との評価を得た。他方で、正答率の低かった問5に関し、スパルタクス団の成立が第一次世界大戦中であることを判断するのは難しいとの評価を得た。しかし、この団体が戦争に反対するグループであることを知っていればこの問題は解けると考える。問8でも類似の評価を得たが、東ドイツから西ドイツに亡命者が相次ぎ、それを防ぐために壁が作られたという一連の経緯を踏まえていれば、終戦から壁建設までに10年以上が経過したことは基本知識に属すると考えた。

Cでは、問9が、アジア・アフリカ諸国が抱える問題などについて考察させる「世界史A」の目標にそった良問であるとの評価を受けた。他方、問10はオタワ会議開催の年代を正確に判断することは困難であるとの指摘を受けた。ブロック経済の形成についての言及があれば判断しやすかったとの指摘をいただいたので、今後の参考としたい。

#### 第2問について

「アフリカ系黒人奴隷の歴史」「華僑の歴史」「ロシア・ソ連の民族問題」という民族の離散にかかわる問題であり、現代世界的前提である諸地域の相互関連や変動を、人間の移動を通して考察させる「世界史A」にふさわしい設定であるとの評価を受けた。特にAは前近代から現代に至るまでの黒人の歴史の基本事項にかかわるもので、まとまりある出題であるとの評価を受けた。ただ、ユダヤ人問題に関する出題については「世界史A」としては難問と指摘された。今後の作題上では、難度に十分に配慮しなければならない。

Aは、問3がアメリカ合衆国における黒人奴隷制度を扱い、「『太平洋貿易の展開』・『拡大する貿易活動』という観点を含み、また『人類の課題について考察させる』という『世界史A』の目標にもかかわる良問であった」との評価を得た。

Bでは、問5が日本の動向との関連からの出題であり、「我が国の歴史と関連付けながら理解させ」という「世界史A」の目標にそう良問であるとの評価を受けた。他方、問8は、シンガポールに関係する二つの国名の組合せを出題したが、シンガポールのマレーシアからの独立に関連しては、「世界史A」の水準から判断すると難問であるとの評価を受けた。こうした点は、今後の問題作成上の参考としなければならない。

Cについては、ユダヤ人のシオニズム運動を問う問9が「近現代史を重視する『世界史A』としても難しい内容」とであると評価された。ロシア革命に関する問10は「狭い時代からの出

題で、詳細な事実判断を必要とするものであり厳しい設問と思われた」と指摘された。受験者にとってなじみの薄い分野であるが、各問とも、21世紀を生きる学生にはぜひ学習してほしい内容である。

#### 第3問について

問6は良問であるが難問、問9は時代判断に詳細な知識を必要とする難問との指摘を受けた。確かに問9の正答率はかなり低かった。しかし問1、問2の正答率を考えると、全体としての難易度のバランスは悪くなかったと考えられる。

Aでは、問3は正答率がやや低かったが、近世以後のイスラーム世界と西欧諸国のかかわりについての出題であったが、「ヨーロッパの進出期におけるアジア諸国の動向」という観点を含み、「世界史A」の趣旨にそった良問との評価を受けた。

Bでは、インド史の中の宗教というテーマの中に、南アジア世界の特質・ユーラシア規模の交流圏という観点を含めながら、現在のアジア・アフリカ諸国の問題も考察させる問題で、「世界史A」の趣旨にそった良問であったとの評価を得た。一部の設問は「やや厳しい」とのコメントがついたが、正答率は非常に高かったので、心配には及ばなかったと思われる。

Cは全体として「国民国家の課題を考えさせるという意欲的な出題」と肯定的な評価を得た。問9は詳細な知識を必要とする難問との評価を受けたが、軽視されがちな社会史について、また近現代の消費社会の重要な要素について問うことも意義があるため、難易度が過度に高くないよう作問することが今後の課題である。問10については、先進的な地域統合にかかわる問いが「世界史A」の趣旨にそい、またリード文とも関連させた良問であるとの評価を受けた。

#### 4 今後の問題作成に当たっての留意点

以上、問題作成部会として、個々の出題についての意図と、設問に寄せられた意見に対する見解を述べてきた。最後に、出題方針等に関する総合的な意見に対して問題作成部会の見解を述べ、今後の問題作成に当たっての留意点をあげておく。

全体としては、高等学校学習指導要領の目標にそい、教科書の内容を踏まえた出題であると評価された。また大問のテーマも「世界史A」にふさわしいものであった。地域別出題では、東アジアに関する設問が減少し、オセアニアやラテンアメリカに関する出題が少なかったとの指摘を受けた。欧米に偏らない出題は部会としても心掛けているが、今後より一層の努力をしたい。一方、時代別出題では、昨年と比べると近現代史のバランスが改善され、「世界史A」の基本的性格にそったものとなった。また、出題形式においては、昨年見られなかった6択問題を出题したためやや難問になったようである。今後、試験問題評価委員会の提言に従って、形式の多様性を増すことを考慮したい。

最後に、「世界史A」の平均点が地理歴史科の他の教科と比べると依然として低いことについては、今後も検討を要する。教科書においてより詳細な記述が増える近現代史に関する設問は、難易度が高くなる傾向を否定できない。とは言え、高等学校における学習の達成度を判定するという大学入試センター試験の機能を考えるならば、より有効な判定結果が出せるように今後も工夫を重ねたい。

## 世界史 B

### 1 問題作成の方針

平成 21 年度の「世界史 B」の問題作成に当たって、問題作成部会としては昨年度の三つの基本方針を以下のように踏襲した。

#### (1) 高等学校学習指導要領への対応

高等学校学習指導要領は、諸地域の形成と諸地域間の交流を主眼とし、特に近現代における世界の一体化の展開を念頭に置きつつ、日本の歴史を近現代の世界の形成過程と関連付けることを重視している。問題作成に当たっては、この高等学校学習指導要領への対応を考慮し、地域間交流や世界の一体化について思考させ、特に日本を含めた近現代世界への理解を深めさせるように、出題を工夫した。

#### (2) 新教育課程教科書の特色を踏まえた出題

「世界史 B」のいずれの教科書においても、図版・図表を活用したヴィジュアルな資料提示が工夫され、諸地域の形成と交流、そして近現代の世界の一体化が重要な主題とされているが、「世界史 A」と同様に、内容については独自色が濃くなっている傾向が見られる。問題作成に当たっては、これらの教科書の多様な記述を踏まえて、特定の教科書で学んだ受験者に有利不利のないようにリード文や出題を工夫しつつ、歴史の幅広い基本的事項を問うた。また地域間の連関や地理的知識も問い、歴史的事象の総合的な理解を受験者に求めた。

#### (3) 出題範囲と形式、難易度

問題数と形式は昨年度のものを踏襲した。高等学校学習指導要領の趣旨にそって、出題範囲は世界の各地域と各時代をできる限り網羅し、教科書内容の範囲内で、基本的事項を問うように努めた。難易度にかかわる方針にも特に変更はなかった。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

#### 第 1 問について

本題では、有史以来、人類が営んできた多様な生業と労働について出題した。生業と労働は伝統的に継承される文化である一方で、経済、社会、政治の動きに多大な影響を受けて変化してきた面も持っている。生業と労働の歴史という観点を用い、社会に密着して世界史の流れを理解させるという意図から作問した。本問題では、明清時代の中国における商工業の発展と生業の多様化、中・近世のヨーロッパにおける下層民の窮乏化と主権国家体制の成立期に現れた傭兵ようへいの関係、またアメリカ合衆国の第二次産業革命と生業・労働の変化について取り上げた。中間全体の正答率はやや高かったが、低い正答率の問題も見られた。

A では、高等学校学習指導要領「世界史 B」「(4) 諸地域世界の結合と変容」における、アジアと世界との結合、アジア地域の繁栄と社会の変容を理解させることを目的とし、明代中期から後期にかけての都市の繁栄と、芸術や文筆活動の生業としての成立をテーマとして作問した。全体としては高めの正答率であった。

B では、出稼ぎ傭兵を事例に、自然環境や政治状況に左右される不安定な前工業化社会にお

いて、特殊な知識や技術を持たない庶民も生きる術を模索していたことに関心を持たせ、生徒自身の職業に対する認識を深めさせることを目的とした。高等学校学習指導要領「世界史B」2「(1)イ 日常生活に見る世界史」の観点から作問した。問題全体としては標準的な正答率であった。

Cでは、19世紀に欧米で急速に産業資本主義体制が確立することによって、大規模な人の移動や労働問題の深刻化が生じたことを理解させるため、高等学校学習指導要領「世界史B」の「(4)諸地域世界の結合と変容」を、代表的な資本家の生涯をテーマに作問した。問題全体としては標準的な正答率であった。

### 第2問について

学校と教育をめぐっては、現代的問題への関心と相まって、歴史学においても研究が進み、近年では多くの観点から論じられている。ここでは歴史における学校教育が地域や時代によって多様な存在形態をとり、様々なあり方を求められてきたことを理解させる意図で作問した。

Aでは、現在のヨーロッパの学校教育がギリシア以来の伝統にあること、またイスラーム世界の学校教育でもマドラサと呼ばれる教育機関の伝統が存在することを理解させることを目的とし、高等学校学習指導要領「世界史B」「(4)諸地域世界の結合と変容」をテーマとして作問した。問1～3のいずれも基本的な知識を問う問題であった。

Bでは、宋代以降中国の教育施設とキリスト教、及び近代の海外での留学運動を理解させるべく作題した。高等学校学習指導要領「世界史B」「(3)諸地域世界の交流と再編」、「(4)諸地域世界の結合と変容」をテーマとした作題である。問3は中国と朝鮮の官吏登用制度、問4は中国におけるキリスト教布教と宣教師の活動、問5は周恩来の役職であり、いずれも教科書に依拠した基本的な内容であった。正答率は問3、問4、問5の順であり、現代史の問題がやや正答率が低かった。

Cは、学校教育の中でも歴史教育を取り上げ、その国民形成・国民統合との関係及びそこから生じる問題とその解決のための努力に注目して作問した。特に北欧とバルカン地域における試みを取り上げ、その歴史的背景を理解させることを目的として、高等学校学習指導要領「世界史B」の「(5)地球世界の形成」を軸に作問した。正答率は全体的にやや低かった。

### 第3問について

本題では、人々の信仰や宗教が個人の思考や行動のみでなく社会のあり方にも大きな影響を与えてきたことから、世界史を信仰や宗教の観点から理解させるという意図で作問した。全体としての得点率は、若干低めであった。

Aでは、広く存在する天体を対象とする信仰と思想を取り上げ、古代の信仰と宗教を問うた。併せて、東北アジアの高句麗の歴史と、アジア国家の建国者について問い、高等学校学習指導要領「世界史B」「(2)ウ 東アジア・内陸アジア世界の形成」の理解を深めるため作問した。問1の正答率は高かったが、問2、問3はやや低かった。

Bでは、東南アジアにおける信仰の重層性について取り上げ、世界宗教とそれ以前の信仰との関係を示し、高等学校学習指導要領「世界史B」の「(3)諸地域世界の交流と再編」と「(4)諸地域世界の結合と変容」を、アジア地域における宗教の広がりを題材として深めることを目的として作問した。問5の正答率が若干低めであった。

Cでは、中世ヨーロッパにおける死生観とそれについての教会の態度を取り上げた。死生観を題材にして教会と世俗社会との関係を理解させることを意図したものである。高等学校学習指導要領の「(3)諸地域世界の交流と再編」、とりわけ「イ ヨーロッパ世界の形成と変動」に対応している。正答率は、問7では科目全体の平均を上回ったが、問8と問9では大きく下回った。

#### 第4問について

近年、世界各地の移民問題が様々な場面で取りざたされているが、移住・移動はまさに人類発祥以来の世界史的な現象である。そのような視点の重要性を理解させる意図で作問した。得点率はほぼ平均的であり、このテーマが、高等学校の世界史教育の中で十分に引き上げられているという印象を受けた。

Aでは、南北アメリカがヨーロッパやアフリカからの大規模な移住により形成されたことへの理解を促すため、高等学校学習指導要領「世界史B」「(4)諸地域世界の結合と変容」をテーマとして、移住者を送り出した諸地域の歴史について出題した。問1と問2の正答率は平均的であり、一般的に広く理解されているものと思われるが、問3の正答率はアフリカに関するもので、やや正答率は低いものであった。

Bは、インドにおける人の移動を取り上げ、受験者に古代以降の南アジア通史とイギリス植民地について連続的に整理させる目的で作問した。写真問題の正答率は非常に高く、やや難問と思われた設問も含めて、全体的な正答率は高かった。

Cでは、中央ユーラシアにおける人々の移住に関する文章を題材にして作問した。具体的には、オアシス都市の性格とその歴史、セルジューク朝の西進、世界史上の人々の移動と移住について取り上げた。これらの設問は、主として高等学校学習指導要領「世界史B」「(3)諸地域世界の交流と再編」に対応し、「(2)諸地域世界の形成」にも関連させたものである。いずれも正答率は6割を超え、標準的な難易度であったと言える。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

#### 第1問について

本題全体については、全体的な難易度は標準的との評価を受けた。事実、全体的な正答率は標準的であった。他方、問4、問8が高く、問5、問9が低かった。残りの設問は平均的な正答率である。

Aでは、問1で唐宋時代の文化人・政治家について問うた。やや易しいとの評価を受け、正答率も高めであった。問2、問3は明代の社会・経済を中心としたもので、いずれも標準的な出題と評価されたが、問2に比して問3の正答率が比較的高かった。評価された以上に全体としての正答率は高めであったが、基本事項の確実な理解が得点に結び付いたという意味では、高等学校での学習の達成度を測る上で適切な出題であったと考える。

Bでは、問6は、「誤文が重要事項を踏まえていて判断しやすく良問である」との評価を受けることができた。一方で、問5では、「マラータ同盟の結成時期を問うのは難しい。やや難問である。」との指摘を受けた。問4及び問6の正答率はやや高かったが、問5の正答率はあまり伸びなかった。

Cでは、問7が出来事の内容や背景を正確に知る必要がある良問との評価を受けた。問8に関しては標準的との評価であるが、①③ともにエディソンに関係するため工夫が欲しいとの判断もされた。また①③は年代を問うので難しいとの評価もされているが、正答率は高く、難問であったとは思われない。他方、問9に関しては詳しい知識が必要とされる難問との評価を受けた。事実、問9は正答率が本中間で最も低く、難問であったことは否めない。教科書にそった内容ではあったが、やや高等学校では重視されないテーマであったかもしれない。社会経済史の出題をする際には出題を工夫することが今後必要となろう。

#### 第2問について

本題では、いずれの中間についても、「リード文と出題内容の関連性が強く、出題の意図が明確に感じられた」との評価を受けた。難易度は標準的との評価を受け、解答結果を見ても、その評価が裏付けられている。

Aでは、基本的な知識を問うたために、問2については標準的な問題という評価を受けた。問1と問3については、易しい問題という評価を受けたが、実際に正答率はいずれも8割を超えている。全体の平均点を上げるのには役立ったが、もう少し難易度を上げる工夫が必要であった。特に問3については、世界史にとっても重要な日本史の基礎知識を問うたが、関連性が希薄であるとの指摘もあり、今後の課題としたい。

Bでは、問4は標準的な問題との評価を得た。問5は問題事項を幅広く問う標準的な問題と評せられた。問6は中華人民共和国の主席と首相の役割を認識しないと難しく、「周恩来の事績を問題とするべきであった」との評価であった。指導者がどんな役職に就いていたかは、当該人物の事績そのものであるが、より該当人物が導き出せるような問題になるように留意したい。

Cでは、全体にやや難しく正答率の低下が予想されるとの指摘を受けた。実際の正答率も全体的にやや低かった。社会史の内容、周縁地域、現代史などを扱う際に、過度に難しくならないよう今後とも配慮しつつ作問したい。出題形式について、問9は地理的な知識を問うことが評価されたが、設問文の題意がくみ取りにくいとの指摘を受けた。今後の課題である。

#### 第3問について

本題全体については、「受験者にとってなじみの薄い地域が多く扱われ、また一つの設問の中で地域も時代も異なった事項を扱ったものが多かったため、全体的な難易度はやや難であった」との指摘を受けた。むしろなじみの薄い地域であるからこそ、出題することによってこうした地域の学習を促す効果が期待できると思われる。

Aでは、問2が高句麗史を問うたが「新羅の半島統一過程を理解していれば正解は十分に可能」であり、出題表現が工夫された良問との評価を受けた。問3も基本的事項との評価を受け、なじみの少ない薄い地域ながら、出題意図が反映できたと考えている。

Bについては、問4の写真が不鮮明であるとの指摘をいただいた。今後は注意したい。問5は難問であるとの指摘を受け、実際の正答率も若干低めであった。

Cでは、問7が「難問」、問8が「やや難しい」との評価を受けた。特に、問7で「死の舞踏」の内容にまで踏み込んだことの妥当性が問われた。ただ、死生観に関して出題可能な事項はかなり限られているし、選択肢もすべて教科書に準拠したものである。また、問7の正答率



はかなり高かった。むしろ、死生観についての小問が問7のみだったことは検討材料としたい。第4問について

ここでは、高等学校学習指導要領でも「諸地域世界の交易や移民による結び付き」として扱われているテーマを多方面から扱ったリード文になっており、世界史ならではのダイナミックな超域的動きに関する内容で、受験者の関心を引き、全体的な難易度も標準的、という非常に好意的なコメントが付いた。

Aでは、問3に関し波線部の箇所が一部、時代に引いてあることに対し、今後の再検討の要望が出されていた。作問の際、教科書記述と設問の難易度を勘案して波線部を決定するので、今後、要望を考慮して総合的に対応したい。

Bについては、写真選択問題で、選択肢を文章表現にすべきだったとのコメントがあった。この設問では、正答率は非常に高く、受験者には安心感のある設問だったが、工夫の余地はあっただろう。第2問は「やや難問」とのコメントが付いたが、作問上やむを得ない出題であった。イギリス植民地についての問題は「良問である」との評価を受けた。

Cについては、おおむね基礎的・標準的な知識を問うものであり、また授業に密着した内容で良問との評価を受けた。これは正答率からも裏付けられる。ただし問7については、「選択肢の文に誤解を招きかねない表現」があったことを指摘された。幸いに、実際の混乱は生じなかったものの、今後とも作問に当たり十全の注意を配りたい。

#### 4 今後の問題作成に当たっての留意点

以上、問題作成部会として、個々の出題についての意図と、設問に寄せられた意見に対する見解を述べてきた。最後に、出題方針等に関する総合的な意見に対して問題作成部会の見解を述べ、今後の問題作成に当たっての留意点をあげておきたい。

今年度は昨年度と比較すると平均点がやや上がり、60点を上回った。問題のレベルがほぼ妥当であったと評価された。高等学校教科担当教員からは、文化史や社会経済史の設問が増え、「文化の多様性」を問う出題と評価された。問題全体としては基本的で標準的であったとの指摘を受けた。出題された地域と時代に関しては、西欧・北米の近代史の割合が少なくなったことに対しては、高等学校現場の実情を考慮し再検討してほしい旨の要望が出された。世界史履修者の興味・関心という観点からも前向きに検討したい。今後も高等学校現場との連携を配慮して、高等学校の学習の達成度を適切に評価できるような問題作成を心掛けたい。